

霊 聲

れ い せ い

2010年10月 (第177号)

北米ホーリネス教団
OMS Holiness Church of North America
www.omsholiness.org
reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一の手紙2章13節)

教団新機構採択に際して



溝口俊治師

■教団新機構採択

二〇一〇年教団総会にて「教団新機構」に関する教団改正憲法と教団細則が採択されました。

約十年にわたるビジョン委員会の方々が試行錯誤しながら、教団の方々のご理解を受けたことは幸いなことでした。この年月は、無駄なことではなく、どのように意見を受け、お答えしていくかを通して多くのことをお互いに学ぶことができました。結果的には、二六諸部のあの中、二二諸部が賛成。代議員七八名参加中、七一名の方々が賛成されました。

■教団ホーリネス・

シエパード委員会

それではこれから具体的に、どのように移行していくのでしょうか。最初になされることは、教団ホーリネス・シエパード委員会の構成です。

このために二〇一〇年教団総会において、現行の常務委員会の方々が新機構移行委員会として務めてくださることが決まりました。そして二〇一一年教団総会において、シエパード委員会・委員の推薦をいたします。

そのために、地域牧師会からもシエパード委員を推薦することになりますので、皆様からも牧師を通して、地域牧師会へ推薦をしていただくと幸いです。

シエパード委員会は、教団全体の管理をいたしますが、実務に関しては教団管理者を通してなされます。

シエパード委員会は教団に仕えてくださって、霊的リーダーシップをとります。それは、諸教会が主イエス・キリ

ストに従う群れ、主なる神様の栄光を表わす群れ、またご聖霊に満たされながら、宣教の業に励む群れとして前進するように祈り、指導するということです。

■教団管理者

教団の実務がなされて、滞りない運営がなされるために、教団管理者が任命されます。最初はパートタイムで、後にはその働きの成長に応じて少しずつ奉仕範囲と時間が拡張されます。

■私達のすること

それでは私達のすることは今何があるでしょうか。それは、これから教団の機構が変わったというだけでなく、新しい出発をしたということをとらえてくださって、教会として、教団として神様がどのように導こうとされるのかを祈る祈りを大切にすることです。

すべてのことの始まりに全能的なる神様への祈りがある時、機構ではなくわたしたちの心が導かれるのです。

修養会の恵み



マカニゲル八須江

(ウォルナツツクリーク教会)

この夏、私は五回目の修養会に参加させていただきました。

修養会前日は胃が痛く、横になってしばらく休みつつ荷造りをしていました。困ったなと思いましたが、今までの経験上、大丈夫という思いが私の心を大きく占めていました。

実は、今までも修養会の前になると体調が悪くなるのが何度かありました。初回、行く前に持病の腰痛が悪化した時も、前日の夜まで息子がひどい下痢だった時も、

本当に守られ元気に過ごすことができました。

やはり今回も、当日朝起きたら痛みはなく、元気に参加することができたのです。神様が守ってくださることを、また今回を通して確信することができました。今回、中道先生は「人間関係の苦闘」というお話しの中から「聖めとは裁かないこと」と言われました。またそれは第一に家庭生活、身近な人間関係において大切であるということが大きく私の心に響きました。今まで「聖め」とは、私にとって身近なものではなく、とても高尚で抽象的なことでした。しかし、「聖め」が具体的に身近なものであることを知り、私にとって大きな収穫となりました。

そしてまた「荒野を歩む祝福」というお話しの中で、人生は三〇歳から七十歳は荒野であると言われました。

考えてみれば、三十歳まではそれほど問題もなく、親も元気で、進学、就職、結婚、出産など、おめでたいニュースが多かったのですが、年と共に問題も多く出てきました。先生のお話から、祝福、

恵み、癒しは「荒野」で与えられるものであることを確信し、荒野を恐れず進んでいく勇気をいただくことができました。

しかし、私は本当に弱い者です。ので、年に一回、修養会で凝縮された霊的栄養を頂いて毎年を過ごしていきたいと思えます。



キム知子

(ウォルナツツクリーク教会)

主の御名を賛美し感謝します。

今年も神様のしてくださることに、大きな期待を持って修養会に臨みました。あの聖霊充滿の会場で、それが私の思いではなく、神様の招きに預かって来られたのだということを変更して示されました。

今年のテーマの中の特に「苦闘」という言葉を鍵に中道先生を通して語られたメッセージから、私個人の宣教、人間関係、信仰について新しく目が開かれ、いくつもの課題が与えられました。

人間同士には相性というものがあります。これは仲良くやれるかどうかということではなく、一プラス一が二以上になるような化学反応を指し、神様のお役に立ちたいと願うとき、自分のできること、できそうなことばかりに目を留めるのではなく、相手の賜物に目を注ぎ、祈り、人の賜物を生かすために生きる。チームを組んだとき、その人の賜物を生かそうとするとき、聖霊様の化学反応の働きを得られるということを学べました。

また、私たちの人生には正に苦闘と思えるような苦しみや試練があります。この荒野と思える時期にこそ、そこでしかない恵み、祝福があり、神様との関係が強められ、神様に取り扱われるチャンスであることをもう一度知ることができました(次ページへ)

荒野生活は人間的には不満や不自由さの多いものではありませんが、人生の荒野で変化し成長させていただけれることを謙虚に受け止めていきたいと心から思います。

主が私を訓練されるということ。しかしそれは私を愛し、私を祝福するのに必要不可欠なものであることを覚え、神様のしてくださる事を期待してあきらめず祈り続けていく者とさせていただきます。

今年も参加させていただき本当に良かったと心から神様に感謝しています。



小野滝恵姉（サンファナンド教会）長野県松本城前、娘と孫三代での記念写真



夏の思い出

スナップ写真



高田百子姉（サンファナンド教会）マウイ島での80歳の誕生日の記念写真。



ウォルナツクリーク教会での夏祭りの様子。涼しそうですね。



聖め

加藤 伸江

(アーバイン教会)

今回、救われた後の「聖め」に関する証しを書かせていただくことになった。

「はい、書かせていただきます。」と、格好良く返事したが、後々、頭が重たくなっていった。その理由は明白である。自分が「聖め」から遠いことを、日々痛感するからである。

受洗から十八年、聖めは折れ線グラフのように右上がりしていくものとは程遠い。聖句暗唱のグラフであれば、右上がりになっていける。でも誤魔化しのきかないきよめは、そんな子供騙しでは歯が立たない。

仏教では、「自らをきよめること」が最も大事だといわれているそうさ。土台無理な話であるが、



ご主人の達郎さんと息子さんの卒業式で

「高ぶっている、神様に祈ってきよめていただくのだ。」などと割り切れる方程式のようなことは言えない。内に持て余す汚さを洗い流したいのは、イエス様を信じていようがいまいが、同じように切望しているはずだからだ。

聖めなくして、教会の奉仕は成り立たない。陰口が向こうで待っている。聖めなくして、仕事場で世と調子を合わせないなんてことは不可能だ。聖めなくして、他人の生活ぶりや伴侶や子供を見て幸せを祈るなんてうそだ。聖めなくして、伝道となる言動や行動はない、



夏の思い出
スナップ写真



中島光成師（ノースカウンティ教会）ヨセミテのヴァーナル滝の前で、息子さんの和基君と。

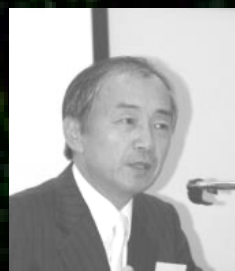
人は他人をよく見ているものだ。たちまち金メッキが剥がれる。これらを誰にも解らないように、自分にも解らないように押し込めるなんてできない。
だから、毎朝、汚いままでも目の前に転がり出る。今日のマナの中に、一日分の聖めを練り入れていただくよう祈るしかない。
自らの思いを言い表した途端、主様は胸を打って引き受けてくださる。御血で洗ってください。
ここに失望に終わらない希望が溢れている。世にはない解決と回復があると確信している。



松田従旨兄（ホノルル教会）ワイキキのビーチ。ハワイはいつでも夏の思い出です。

北米日系人社会に貢献した人々

オレンジ郡教会 牧師 杉村 宰



ない貢献
をしてい
る。

戦後は
一九四六
年六月に

「ララ」代表として訪日している。民間人としては同年の三月に教育視察団が初めてアメリカから日本を訪れているが、それに続く。「ララ」では大佐の地位であった。その後、一九四九年に第四代普連士学園長に就任し、それから一九六〇年に帰米するまで、理事長、学園長を再任している。

同時にアメリカ・フランス奉仕団の事業の一つとして、日本で国際セミナーを始めた。外国との行き来が自由でなかった当時の青年男女に、日本人学生や外国人学生を自由に討議させ、国際理解と交流の重要性に目を開かせるというプログラムを例年のように続けてきたのだった。

一九五〇年にヴァイニングがアメリカに帰った後、前後六年にわたって皇太子殿下と皇后様の英会話教師として週一回の御進講を続け、義宮殿下と内親王方の授業

も受け持っている。帰国後、日系の南カリフォルニア・キリスト教教会連盟主催では親善使節として彼女の講演会が催されている。

一九六〇年には日本政府から「勲三等瑞宝章」が贈られている。日本赤十字社も彼女に「最高栄誉賞」を送り、東京都も彼女に「都民の鍵」を贈っている。

一九七八年六月二十五日、皇太子殿下ご夫妻は南米パラグアイおよび移住七十周年記念式典のためのブラジルご訪問の後で、特にフィラデルフィア市にお立ち寄りになり、殿下の前任教師であるヴァイニング氏とローズ氏のお二人とのご親交を深められている。

その翌年の一九七九年二月四日にローズ氏はフィラデルフィア市で心臓麻痺のために召されている。享年八十二歳であった。その人生の大半である六十二年間、彼女ほど日本人に仕え、日本人を愛した人物も稀有であろう。日本人へキリストの愛を見せてくださったさり、人々から親しく、「グレート・ハート」と呼ばれた実に献身的で、大きな心を持った人格者であった。

ペンシルヴァニア州のフィラデルフィア市郊外でローズ家の次女として生まれた。父のエドワードは開業医で、一家は敬虔なクエーカー教徒であった。叔父のジエームスも医者であったが、彼はブリンモア・カレッジで初代の学長となっていて、そこで津田梅子が入学しているのである。後に彼女は津田塾大学を創設している。

小中高一貫してフランス教育を受け、コロンビア大学では修士号を取得する。その頃、フィラデルフィア市付近には青年期の内村鑑三と新渡戸稲造らがいて話を聞く機会があり、それを通じて日本人への理解を深めていたようである。

一九一七年、まだ二十一歳の若さで東京三田にある普連士学園の教師として初めて訪日している。一九三五年のこと、普連士学園教師館の階下のメイドの部屋で荒々しく争っている音が聞こえてくる。彼女と共に同僚の教師サラ・スミ

スも目をさました。学園に入った泥棒をメイドが見つけた。それでドタバタしていたのだった。その時にローズ氏は言ったものだ。「下まで私についていっしょい。できるだけ大きな物音をたてながらね」二人が一緒になって努力したことが功を奏し、闖入者は震えおののいているメイドの所に行く前に退散していたというエピソードがある。ローズ氏本来のたぐい稀な知恵と天衣無縫と言われた彼女の性格の一端を垣間見させてくれた一事件であった。

一九四〇年に帰国したが、日米戦争勃発のために再訪日かなわず、母国に留まること六年の長きにわたる。その間アメリカ・フランス奉仕団職員として、一九四五年まで強制収容所につながれていた多数の日系人の世話をしたり、国務省に掛け合ったり、アメリカ軍の日本爆撃即時停止の嘆願をするなど、日本人のために計り知れ

教団ニュース

■二〇一〇年牧師リトリート
一月二四日(月)～二七日(木)
会場 Water Dolrosa Retreat Center
オンラインにて登録できます。

■先の総会で選出された今年度の
常務委員、司法委員は次の通りで
す。

*常務委員

議長…山下ゲイリー博士
常務書記…大倉信師(日語)
教会開拓…ロバーツ・ジョー師
伝道…未定
教育出版…島田直師
福祉…横溝ブライス兄
ペンション…中筋ポール師
教職任命…伊達スタン兄
ヴィジョン…イー・ロッド師
財務…知念ドリス姉
玉川フェイ姉
教理調査…鈴木栄一師
世界宣教…富田セツ兄
無任所…辻村ルツ姉

*司法委員

中尾邦三師、
古山隆師
ウォールター斎藤兄
ローランド狭間師
ダンカン・ウー兄

教会ニュース

■サンロレンゾ教会日語部婦
人会は九月十二日の礼拝後、
日英得両語部の七十七歳以上
のメンバー招待し敬老愛さん
会で先輩クリスチャンの長寿
会をお祝いしました。

■九月十一日、ロサンゼルス教
会では、来年度の教団総会準
備会がもたれました。常務委
員会、葛原ライブラー委員
会からも出席者があり、教団
総会のテーマについて話し合
いました。

消息

■ハレルヤ! 主よ 感謝し
ます。十月には七二歳になり
ます。家内ともども よく歩
いています。八月から一月ま
で、セミナー伝道会、聖会講
師、と続きます。家内も個人
的に『生の5つの目的』を教
えています。また「子育て」
教室も持っています。どうぞ
覚えて お祈り下さい。
四国高松にて

大川道雄、さと子

教団所属教会

(カリフォルニア)

フリーモント教会
サンロレンゾ教会
サンタクララバレー教会
ウォルナツクreek教会
ロサンゼルス教会
サンファン教会
サウスベイ教会
ウエストコピナ教会
ウエストロサンゼルス教会

オレンジ郡教会

アーバイン伝道所
ホイットティア教会
サンディエゴ教会
ノースカウンティ教会
(ハワイ)

ホノルル教会
ウエストオアフ教会
ミリラニ教会
(アリゾナ)

ツーソン教会
(詳しくは www.omsholiness.org
を参照)



■中村裕二師はCD『聖霊の風
が』をリリースされました。CD
二十ドル、ソングブック六ド
ル、セット価格二十五ドルで
す。購入希望者は、
yinakamura@gmail.com
までご注文ください。

編集室から

▼今号はなんとカラー誌面となり
ました。少しでも目に留まるよう
にとの願いと、今回は『夏の思い
出』というテーマで写真も掲載し
ましたので、思い切ってカラーに
挑戦しました。▼皆さんの中にも、
誌面のレイアウト作成が大好きと
いう方がおられると思います。が、
『霊声』作成のお手伝いを頂けた
ら嬉しいですよ。ご一報ください。
▼中村先生のCD『聖霊の風が』聴
かれましたか? 礼拝の中で会衆
賛美として、とても歌いやすいで
すね。▼ハワイに来て家族として
は五年ぶりに日本へ行きます。家
中大興奮の毎日ですが、子供たち
が行きたいのはコンビに? だそう
です。
(真)